お義父さん

●つい先日、夫である住職信人の父・若林眞人「お義父さん」が亡くなるという悲しみ事がありました。日頃から「出会った方とは、いつか必ず別れが来る」という事は聞いてきたつもりでも、実際に身近な方が亡くなると、驚きを隠せません。

父が救急車で運ばれたという知らせを聞いて、前日に慌てて、大阪に帰っていた夫からの電話が鳴りました。「今朝、お義父さんが亡くなった」という知らせでした。体調が急変して、僅か二日ほど、この突然の別れに、驚きつつ、遠く離れた鹿児島の地で、涙が溢れ出てきました。

●私が初めて「お義父さん」と会わせて頂いたのは、大阪にある「行信教校」という仏教の学校に通っていた頃でした。「専精舎」という、この学校で一番大切な行事で、学生を前に法話をくださる先生の一人でした。だから「先生」と当たり前のように呼んでいました。その方が夫と結婚してからは「お義父さん」と呼ばせていただく関係となります。困ったことに、「先生」から、急に「お義父さん」と馴れ馴れしく呼ぶのは、なんだか失礼に思えて、どう呼んだらいいのか戸惑っていました。あるときの夕食で、そのことを直接にたずねると、笑顔で「お義父さんてよんでや」の一言に、嬉しくホッとしたことを思い出します。

●お義父さんは毎年、照明寺には「永代経法要」の講師として来ていました。その時に、たくましく育つ孫に会えるのも楽しみの一つだったようです。休みの合間に話をしたり、じいじの為に描いた絵を褒めてくれたり、笑顔でいつも子どもたちを可愛がってくれました。大阪と鹿児島の隔たりの為に、たくさんは会えなかったけど子どもたちにとっても「眞人じいじ」は大好きで特別な存在です。

娘たちが小学校や保育園から帰ってくると、「眞人じいじ」が亡くなったことを伝えなければなりません。夕方のお内仏に子どもたちを集めて、涙のなかで、その事実を伝えました。末っ子はまだよく分かってない様子でしたが、みんな、ちゃんと話を聞いてくれました。娘たちにとって、初めての大事な人とのお別れです。

この日は、いつもより丁寧にお夕事のお参りをしてくれました。子どもなりに、何か思うところがあったのでしょう。その後、思い思いに、「眞人じいじ」に供える「お手紙」や「折り紙」を作りはじめました。

皆でテーブルを囲み、お供えを作っているときに、涙を浮かべて、長女がひとこと「じいじは、お浄土にうまれて、ののさまになったんだよね」

寂しく悲しい中ではあったけれど、娘のその言葉が嬉しく思いました。お義父さんも聞き続けてきた、「お浄土」に生まれ「仏さま」となる。そんな言葉が、いつの間にか子ども達にも届いていたことが有難かったです。

別れていくことは寂しいことですが、次は私をお浄土へと導いてくださる仏さまとして、ずっとそばにいて下さる。お念仏申すと、何だか「お義父さん」が今まで以上に近くにいて下さるような、あたたかな気持ちになります。

なもあみだぶつ